教育実習の報告

「きっかけ」をつかむ

古手川まりか
（史学・文化財学科４年）

はじめに

「読者の学生の皆さんは、いつから『教師』という職業に興味を持ち始めたのであろうか。また『教師』になりたいと強く思ったのはどんな出来事がきっかけであろうか。」一人一人が、教職履修へとたどり着くまでの決断や、それに伴う何かしらの努力があったはずである。

私が「教師」という職業に興味を持ち始めたのは中学２年生のころで、きっかけは尊敬できる先生に出会えたことであった。そして、この大学生活を通し、教師になりたいという気持ちが明確になった。

今回お伝えする内容は、来年皆さんが取り組む教育実習に向けての気持ちづくりについてである。教育実習を終えて、私自身が大学でやっていてよかったなと思うことが３つある。

指導案への取り組み

１つ目は指導案の作成である。３年生に入り、複数の教職講義で指導案を作る機会が増えてきているのではないだろうか。

中学「社会」と高校「地歴」「公民」の免許状を取得するために教職課程を履修している私も、３年生の後期はいろいろと苦戦していた。特に、問題となった点は地理と公民に関する知識不足であった。高校のころ専攻していた「世界史」については知識があったが、「地理」は社会科の分野の中でも少し苦手意識があった。ある程度、教科書で流れを追うことは出来たが、指導案を作成するとなると、ただ教科書の内容を要約して並べ変えるだけになってしまった。教科教育法の授業で何度も見直しをしてもらい作成する中で、大事にしなければならないことを考え直すことができた。

重要な点は「世界史」「地理」「公民」がつながっているということである。歴史上の出来事はある場所で起きており、その土地の環境が関わっていることがある。条約や政治にだって歴史がある。それを踏まえて関連付けをすることで生徒の理解が深まるきっかけになる。この点を私はおろそかにしていた。しかし、このことをふまえた授業改善には相当の時間がかかるのである。私ももう少し時間をかけていたら改善できていたのではと後悔した。

教育実習に行った際にも、自身の知識不足に落胆した。実際、３週間の教育実習での私の１日の睡眠時間は約２時間であった。私に課された授業数が少し多いこともあったが、指導案の作成、改善に大幅な時間を費やした。３年生のころにもっと自分に負荷をかけ、知識をつけておけばよかったと強く思った。

授業をするにあたって

授業を行うことは、教師であれば誰も避けて通ることができないが、一番難しいことだと私は思う。例えば、教師を目指す者の中には人前で話すことが得意ではなかったり、臨機応変に対応することがスマートにできなかったりする人もいるからである。

どれだけかみ砕いた表現ができるか。これは私が１番苦戦したことである。私は史学・文化財学科で行われている教職勉強会に所属しており、授業を練習することもあった。そのおかげもあって教壇に立って話をすることには、教育実習の早い段階から慣れることができた。

３年生の教科教育法での模擬授業では、わかりやすい表現方法（ことばの選択や口調、仕草など）を重視すること、そして授業の進め方を改善する事を目標としていた。大学で行う模擬授業の多くは、同じ史学・文化財学科の学生を前にして行うものであ

り、歴史が好きな人が集まっている。実際の教育実習では、歴史が好きな子もいれば、苦手な子、興味がない子、さまざまであった。教室にいる全員がわかる表現をしなければならないことを、教育実習中に痛感した。

授業をすればその都度、多くの反省点が生まれてくる。改善するためには何度も練習することが大切だと私は思う。教育実習までになるべく多く授業を練習することをお勧めする。

興味を持つこと

３年生の頃の私の目標の１つが、多くの事に興味を持つことであった。その１つの手段として多くの人とコミュニケーションを取ることを意識していた。人の興味の観点やそのジャンルはさまざまであり、私の知らないことが多いように感じる。

それまでの私なら自分の好きなことだけに集中していれば良いと思っていたが、授業をする上で多くのジャンルに精通することは重要であり、そのことによって自分自身も勉強になり、また生徒も授業を楽しいと感じてくれるのではないかと思ったのである。また、興味があることが増えると、会話をする際の武器にもなる。さらに相手のこともよく知ることができ、交友関係も広げることができた。以前より相手を思いやる気持ちが深まったと思えるようになった。

また、２つ目には新聞を読むように意識していた。私は新聞を取っていないため８時半ごろから図書館で新聞を読んでいた。多くのことに興味を持つことはプラスになるように私は思う。

さいごに

以上３点が教育実習に行く前に私が意識していたことである。実は教師を目指すうえで重要なことは日常生活の中に多くあるように思う。普段はそれに気づきにくいことも確かである。その点、実際に教育実習では、さらに多くのことに気付くことができた。教育実習は何が起こるか予測不可能であるため、多くの準備が必要である。多く準備したものだけが達成感や、反省の心などさまざまな気持ちを味わえると私は思う。

実習を通し、障がいを持つ生徒とかかわることで、私の関心はまた１つ増えた。まだまだたくさん勉強したいと感じることができたのである。アンテナをはっていれば、教師を目指すうえで重要なこと（たとえば障がいへの理解や対応など）を意識するきっかけは生活の中にたくさん転がっている。是非この学生生活の時期を大切に過ごし、皆さんの教育実習がより良いものになることを応援している。

私にとってのヒーロー

藤原　拓道
（史学・文化財学科４年）

はじめに

私は、母校の小中学校で３週間教育実習を行った。教科は社会科で、担当学級は中学部３年１組であった。授業は全学年を担当し、また、３年生の道徳の授業も合わせて、計８回行った。さらに、部活動にも関わり、卓球を教えた。

児童生徒との距離を縮めるために

①児童生徒と過ごす時間を大切にする

実習校は、児童生徒を合わせて16名の小規模校であった。また、その約半分は里親制度を利用している児童生徒で、山口県や千葉県、遠い所ではニュージーランドから留学してきていた。それらの児童生徒の多くは、大きな学校になじめずに学校に行けなくなった子、勉強についていけなかった子などであり、様々な理由で転校してきていた。

実習初日、わたしも生徒も緊張しており、どちらも積極的に話しかけることができないでいた。しかし、私はこのままではいけないと思い、給食の時間を使って、自分から話しかけるようにし、生徒一人

ひとりの顔と名前を覚えた。生徒は最初は緊張している様子だったが、興味・関心のある話だと食いつき、次第に生徒自身から話しかけてくるようになった。

昼休みになると、生徒から「一緒にサッカーしましょう」と声をかけてくれ、児童生徒はもちろん小中学校の先生方みんなで集まって一緒に遊んだ。

実習中は教材研究や日誌の記入で時間が足りなく、指導教諭からは「無理して付き合うことはないよ」と言われた。しかし、私がこの学校でできることはなにか、他の先生方より優るものは何かと考えた時、生徒と年齢が近いことだと思った。だからこそ、なるべく一緒に体を動かして仲を深めたいと思い、３週間ほとんど児童・生徒とバトミントンや野球、けん玉などで遊んだ。そのためにも、教材研究や日誌は授業の合間や家でしっかり行うように心がけた。

また、実習の３週間は毎朝７時に出勤し、生徒とともに朝のあいさつ運動や清掃に参加した。あいさつを児童生徒と交わすと、やはり今日一日頑張っていこうという気持ちになった。また、「今日の理科の授業で、ペットボトルロケット飛ばすんだ」「昨日、YouTube見てて、寝るのが遅くて眠いです」など会話をすることで、その日の児童生徒の体調や気持ちを知ることができた。他にも、全校の特別活動にも参加した。私が中学生のころからしていた俳句活動では、学生時代を思い出して、アドバイスをした。

実習中はほとんど一人でいることはなく、児童生徒といることが多かった。そのため、児童生徒の一人ひとりとたくさん話すことができた。小規模校だからこそできる密着した生徒指導だと感じた。

②生徒のお手本を目指す

私が生徒指導で気を付けたことは、私自身が自然体で接することである。児童生徒は先生の言葉や行動に対して敏感に反応する。だからこそ、私は児童生徒の前ではきれいごとを言うのではなく、ありのままの自分の想いや考えを伝えようと心がけた。また、身なりを整え、あいさつなども、どの子どもたちよりも大きな声で行い、時間もしっかり守った。自分自身ができていないのに、生徒を指導するのはやはりおかしい。生徒もそのように思うだろう。私は生徒の「お手本」になろうと励んだ。すると、児童生徒も時間を守り、身なりもきちんと整えることができた。

私にとって生徒指導とは、生徒に言葉で説明するよりは、自ら行動で示し、生徒自身が自然とこれではだめだと理解することだと思う。

③「今日の授業は生徒たちに救われましたね」

私は実習の終わりに、中学３年生の道徳の研究授業を行った。題材を一から作り、読み物も自分で文章化するなど、とても苦労した。当日も最後まで悩み、自分自身も迷いながら授業を始めた。案の定、舞い上がってしまい授業自体が止まりそうになった。しかし、生徒がそんな私の様子を感じてか、「先生、私はこんな風に思うんですが…」「私も…」と次々と手を挙げて意見を言い、なんとか最後まで授業をすることができた。

授業の反省会の時に校長先生から「今日の道徳の授業は生徒たちに救われましたね」と言われた。本当にその通りだと思った。生徒たちがヒーローに思えた。校長先生は「生徒が助けてくれることは、藤原先生がこれまで生徒たちのそばにいて、しっかりみてくれたからですよ」とおっしゃった。

生徒と信頼関係を築くまでには時間がかかる。しかし、生徒と真摯に向き合えば、生徒もしっかり応えてくれるのだと、この時身に染みて感じ、自分がやってきたことは間違っていなかったんだと気づくことができた。

教育実習を通じて

３週間の教育実習は、あっという間に過ぎる。私は全校児童生徒16名という小規模校の中で、先生たちの一人の生徒に対する向き合い方をまじかに見ることができた。職員室では常に先生方が生徒一人ひとりのことについて「○○さんは遅刻せずに来て

いました。」「○○さんは宿題を忘れてきたが、珍しい。なにか家であったのかなぁ。今日の空き時間に話してみます」などたくさんの情報を発信し、教員みんなで一人の生徒のことを考えていた。開発的な生徒指導とはこういうことだと知ることができた。

生徒が問題を起こした際に叱るといった強い生徒指導もあるのかもしれない。しかし、私は生徒一人ひとりと真摯に向き合い、事前に不登校やいじめを予防できるような生徒指導をしたいと思う。また、今回、生徒のことを理解することは、生徒指導や学習指導などすべての教育指導をしていくうえでためになると感じた。

私は今、不登校の児童生徒の支援を行っている。様々な理由で不登校になっている児童生徒とともに、一緒に勉強をしたり、ドッヂボールをして遊んだりしている。子どもたちは本当に楽しそうに常に笑顔で、学校に行くことができていないことを忘れてしまうほどである。おそらく、実習に行く前の私であったら、なんで学校に行かないのだろうと自分だけの視点で批判的に考えていただろう。しかし教育実習を経た今は、児童生徒の想いや彼らを取り巻く環境に気づくことができるようになった。子どもだからといって、「わかってないだろう」などと下に見てはいけない。子どもでも周りの環境や人の心などに敏感に反応する。私ができることと言えば、少しでも子どもを取り巻く環境をより良いものにすることだと思う。そのためには、日々の子どもたちとの会話を通じて、しっかり彼らの考えを受け止め、理解し、求めている答えに対して、嘘をつかずに返すことが重要だと思う。

予想外

濵野　匠
（史学・文化財学科４年）

はじめに

この文章では、とくに生徒指導について報告を行う。私は、６月４日から22日まで高等学校で実習を行った。私が、実習に行く前にすでに実習を終えた友人が大学に帰ってきており、実習の話を聞いていた。友人は「いい子ばかりでやりやすかった、授業は大変だったが生徒が集中して聞いてくれたおかげで助かった、教師になりたいと改めて思った」などと話し、充実した実習を行ったようであった。それを聞いて私は、意欲がわき、早く実習に行きたいという気持ちをもって実習先に向かった。

教育実習スタート

実習１日目。最初の仕事として担当クラスに行き自己紹介をした。その時の生徒の反応はとても良く、質問がたくさんあり、好印象であった。

次に、日本史の授業を観察しに行った。この時に、衝撃的なことが起きた。普通の授業であれば、教師の声掛けにより授業が始まり、生徒は教科書を出し、授業を受ける態勢となる。しかし、私の実習校では違った。

まず、教師が授業のチャイムが鳴るのと同時に声を掛け号令を行った。ここまでは普通であった。教師が教科書を開くように指示を出した。すると、生徒は数人しか教科書を出しておらず、残りの生徒は教科書を開かず周りの生徒としゃべっているか、ひどい生徒は教科書を出さずに、大きな声で周りの生徒と話していた。教師は注意をしていたが、生徒は無視をして私語を止めようとしなかった。結局全員が教科書を出したのは、授業開始から20分後であった。

また、この日、別の授業を観察した時には、隣のクラスで喧嘩が起きた。ある生徒が「隣で喧嘩が起きている」と叫んで、授業中にも拘わらず隣のクラスに走っていくと、それに便乗してほとんどの生徒が隣のクラスに行ってしまい、教室に残されたのは、教師と私と数人の生徒だけであった。

この状況を見て、私は当初抱いていた高等学校のイメージ（生徒は素直に授業に取り組む）とは違うと感じ、授業どころか生徒指導をしっかりしていかなければと強く思った。

生徒指導の難しさ

実習５日目で初めて授業を行った。大学の講義や模擬授業の会などで、模擬授業を何回か行っており、経験を積んでいたので、準備段階まではとても自信を持っていた。しかし、いざ授業を行うとその自信は一瞬で吹き飛んだ。

授業開始と同時に教科書を開いてくれるかどうか心配だったが、予想通り数名の生徒しか教科書を開いておらず、残りの生徒は開けようとしなかった。これでは授業ができないと感じ、私は机間巡視を行い、少し強めに注意をした。それでも、全員が教科書を開いたのは授業開始から10分後であった。ようやく授業ができる態勢になったので、授業を始めた。しかし、ここでも問題が起きた。授業開始と同時に寝る生徒がたくさんいた。勉強に対する意識が低い生徒が多く、日本史に興味をまったくもたずに寝てしまい、授業をまともに聞いている生徒は、クラスの３分の１いるかいないかであった。また、寝ている生徒を起こして授業を行っていても、「日本史なんて将来的に必要ない、過去の歴史なんか興味ない」などと発言する生徒が中にはいた。授業中に私が生徒に質問をしても、全く発言をしようとせず、この日の授業はただ時間が過ぎるだけで内容が深まらないものであった。

授業が終わって反省をする時も、私の授業が面白くないから生徒は聞いてくれないのかと考え込んでしまった。この日から自信を無くしてしまい、試行錯誤を繰り返すがあまり良い授業をすることができなかった。

恩師からのアドバイス

なかなか授業が上手くいかない日が続き、悩んでいるときにある先生が私に声を掛けてくださった。その先生は私が高校１年生の時の担任の先生であった。

先生は「お前が担当しているクラスは、その学年の中でも１番問題児が集まっていて、手間がかかるクラスだから上手くいかないのは当たり前だ。よく考えてみろ、お前が１年生だった頃のクラスも手間がかかるクラスだった。けれど、上手な先生は生徒一人ひとりの名前を大きな声で呼んで寝かせないようにしていた。授業の内容で生徒に質問をする時も、全体に聞くのではなく直接生徒の名前を呼んでいた。すると、生徒は自分が当てられたことを認識して、自然と何らかの言葉を発しようする。上手な先生は、これが出来ていたから授業が成り立っていた。授業者は、お笑い番組の司会者のように生徒との会話を上手く回さなければいけない」。このような言葉をいただき、悩みが一瞬で吹き飛んだ。

高校時代を振り返ってみると、授業が面白いと思う先生はコミュニケーション能力が高く、授業の最初には最近のニュースや出来事など雑談して、生徒との会話をいれる事により信頼関係を作っていた。勉強についてなかなか関心をもてない生徒に対して、受け身な授業を教師がするのではなく、このような工夫をしながら授業を行えば成り立つということに気が付いた。この日をきっかけに意欲的に授業改善を行った。

授業を改善してから

恩師のアドバイスを受けて授業改善を行った。課題であった教科書を全員開くかどうかという点は、教科書を開いていない子に対して、大きな声で名前を呼び注意をすることで、克服することができた。

次に、授業の進め方であるが、これまで授業の開始と同時に授業の内容に入っていたのを改善し、授業の最初の５分は最近のニュースや出来事など雑談

を入れて、生徒とのコミュニケーションをとる時間を設けた。この時間を挟むことにより、寝る子はほぼゼロに近くなり、生徒の方から積極的に発言が出るようになった。ここまで順調だったが、授業の内容に入ると寝るのではないかと心配であった。生徒の名前を直接呼び、発言できる機会をたくさん設けることにより、いつ自分が質問にあたるかわからないので、自然と緊張感が生まれてきて寝る子が少なくなった。

ちょっとした工夫をすることにより、授業の進行もスムーズになった。

まとめ

私の行った実習ではたまたま授業がスムーズに成り立たないクラスであったということはあるが、このような学校も中には存在するということを頭の片隅に置いてほしいと思う。私はこのような学校に行くことにより、多くの「予想外」を経験することができた。今後教師を目指していく上で、「予想外」はそれに対応する（個々の生徒への働きかけなど）ことでかなりプラスになった。この経験を活かして、教師としてこれからもスキルアップをしていきたいと思う。

授業観察から授業準備へ

長峰　千紘
（国際言語・文化学科４年）

はじめに

私は５月28日～６月15日までの３週間、母校の中学校で教育実習を行った。教科は国語、担当学年は２年生で５クラス中４クラスの授業を合計10回行った。この10回には道徳も含まれていた。ここでは、国語の授業計画や準備について述べる。

実習前の模擬授業の実践でわかったこと

私は授業実践に自信がなかったこともあり、前もって実習校に使用教材を教えていただくことにした。扱う範囲は実習初日になるまで明確にはわからないと言われた。ヒントは多少いただけたので「おそらくここだろう」と範囲を絞り、模擬授業の会で模擬授業を行った。教材研究と、授業で取り扱えそうな部分をピックアップしたワークシートの作成などを準備していた。多くの人に参観してもらい、良いところや改善点を指摘された。

事前に模擬授業をしたことにより、50分の中で授業がどのように流れていくかがわかった。このことで少し自信がつき、教育実習に挑んだ。

実習中の授業観察で気付いたこと

授業準備をしていく上で一番重要なのは授業観察であると感じた。教育実習の初日に担当教諭から「期末テストの範囲の授業が終わってから授業をお願いしたい」と言われ、２週間は授業実践を行わずに、多くの先生方や、同じ時期に実習を行っていた教育実習生の授業を観察した。

まず、担当教諭の授業を観察した。先生はどのような進め方をしているのか。授業を受けている生徒がどのような反応をしているか。このような視点を持って観察を行った。授業は主に生徒に考えさせるものだった。例えば、説明文を取り扱う時には、教科書の中で重要な文章を報告文としてまとめた報告書形式のワークシートを配布し、文中にある重要箇所を教科書から抜き出しワークシートに書かせた。熟語等の言語事項を取り扱う時には、グループワークを取り入れ、グループごとにホワイトボードに熟語をどんどん書かせて、発表させていた。

説明文でのワークシート作りの時は、生徒たちが自分だけの力で考えようとしている姿が見られるなど、グループワークをしているときはとても活き活きしていたのを覚えている。また、先生は机間巡視や指導を行い個人指導の必要とされる生徒のもとへ行くなど、クラス全体を見ているように思えた。

また国語以外の授業も観察した。他教科はどのよ

うな教え方をしているか、工夫は何かなどに注目した。先生によって教え方は異なるが、参考にしたいと思った授業はいくつもあった。

ここでは、１年生の数学の授業を取りあげる。その授業では、計算は直接板書、重要事項は色画用紙に書いたものを黒板に貼っており、とても見やすい板書であった。授業観察後、私は、「どうして色画用紙をたくさん使うのか？」と質問した。先生は、「黒板を彩った方が見やすいというのもあるが、生徒の中には書くのが苦手や聞くのが苦手という生徒がいるので、視覚から情報を得てもらいたい」と仰った。「なるほど」と思った。

授業準備で工夫したこと

前述したように、実習前に模擬授業を行っていたので、範囲が当たれば指導案を少し訂正するだけで済むと私は甘く考えていた。しかし、実際その範囲は期末テストの範囲に入っていたので授業はできず、急きょ言語事項の「類義語・対義語・多義語」を取り扱うこととなった。言語事項は基本的に一時間で終わらせるものだが、私は２時間構成で授業計画を行った。授業自体は最後の一週間で行ったので、準備期間は二週間と十分にあった。ここでは、私が一時間目に行った授業準備の重要点を挙げる。

１つ目は、授業計画である。一時間目に類義語、対義語、多義語とはどういうものかを説明、二時間目に学校生活の中で使われる類義語、対義語、多義語をグループで探すとしていた。これは、教科書を参考に考えた計画である。特に力を入れて準備したのは一時間目である。一時間目で類義語、対義語、多義語の知識を得てもらうためである。

２つ目は、観察した授業を参考にしたことである。数学の授業観察を行った際に参考にしたいと思った色画用紙を使った視覚的な授業をしようと考え、準備を進めた。私は、イラストを使って生徒に楽しく考えさせたかったので、模造紙や画用紙にイラストを描き、黒板に貼ることができるように工夫した。この時に気を付けたのは「大きさ」である。教室の後ろでもしっかり見えるくらいの大きさで文字やイラストを描いた。生徒にとってわかりやすいものに仕上がったのではないかと思う。

３つ目は、アウトプット学習である。計画としては、一時間目には知識の定着を目標としていたので、インプットとアウトプットができるように練習問題を独自に作成した。さらに、わざと時間を５分程度余らせて、対義語フラッシュカードというものを行った。これは、遊び感覚で学んだ知識を定着させることを目的に、準備をしていた。

また、この２時間構成の授業を４クラスで行った（計８時間）ため、その都度、改善しながら授業準備をした。

おわりに

大学内で行っていた模擬授業は、現代文や古文など文章形態のものを取り扱っていたため、言語事項の授業を行うことになり、戸惑った。何をどのように準備すればいいのかわからなかったが、授業観察を参考に準備を進めることができた。言語事項であったので、「ことば」に関する知識が必要で、自分自身の国語の力不足が感じられた教育実習であり、準備の大切さを知ることができた。

教育実習を終えて、教育実習前の皆さんにアドバイスをするとすれば、模擬授業を真剣に行うことである。模擬授業をすることで授業実践の様々な感覚や授業準備の仕方などを把握できるからである。授業は準備なくしてできるものではない。おそらく、人前で授業をするのは苦手な人もいると思う。しかし、現場に行けば、嫌でも30人程度の生徒を前に授業をしなければならない。そのために、講義内で行われる模擬授業などに真剣に取り組むと苦手意識も軽減できると思う。模擬授業は大切です。

主体性を引き出す班活動

山下 美波
（発酵食品学科４年）

はじめに

私は、５月28日から６月15日までの３週間、母校の中学校で教育実習を行った。担当した学年は２年生で授業は計13回行った。ここでは、授業実践の取り組みについて、自分が授業するまでに考えていたことと、実際の授業の違いやどのように授業を実践したかについて述べていく。

授業実践の難しさ

教育実習の最初の一週間は授業観察を行った。授業実践は２週目から始まった。その前半では、授業をする者として、授業内容を伝えて生徒に理解させることの難しさ、多人数を対象としてそれを行うことの難しさを知った。私が授業を行った内容は「質量保存の法則について」である。実験３コマ１セットを含む計５コマを３クラスで行っていった。初めての授業から実験だったが、前回までの復習、実験説明までは思った通りに進めることができた。いざ実験が始まると生徒の勉強意欲は上がったものの、遊んだり暴れたりする生徒も見られた。随時注意をしながら進めていったが、全く声が通らず注意を繰り返すうちに時間がたち、指導案上の時間配分に間に合わず、まとめをする事ができなかった。

実験は生徒にとって楽しいものであり、実験中でも生徒は比較的自由に話をするということは私も経験していたので、多少は時間のロスが発生するだろうと思っていたが、それを止めることができない自分にとても無力さを覚えた。授業後に先生から「初めての授業だったので時間をオーバーしてしまうことはしょうがないことだけれど、生徒に全然声が届いていないし、実験をどれくらいの時間で終わらせないといけないかなどの明確な指示がないと、生徒は自由時間と勘違いして今日みたいな授業になる」と言われたことで、大学での模擬授業を思い出した。

大学で行う模擬授業では、生徒役が大学生なので時間を指定しなくても「終わったので次に進みます」という進み方ができ、逆に時間が余り、50分間を使いきらずに終わってしまうことが多かった。しかし、中学生相手になると一つ一つの指示が明確でなければ、50分という時間では終わらせることができないことがわかった。次の授業からは時間を設定することで、どうにか50分で授業を終わらせることができた。

主体性を引き出す班活動

「質量保存の法則」は、金属の酸化における質量の関係について実験後に質量のデータをまとめ、グラフを描かなければいけない。実験そのものは楽しくできるが、理科の基本的思考法を用いて結果を整理し、数学的なデータ処理とグラフ化が求められる単元である。

すべての実験において説明段階で物質名を板書し、生徒に化学反応式を完成させた後に、実験で何ができるかなどについて説明し、実験を行い、反応を見て班でなぜそうなるかを考えさせるという流れをとった。第一の生徒の課題は、化学反応式を完成させ、化合の質量比率を示すグラフを書き、実際に何対何なのかを特定することだった。塾で習っている生徒は答えがわかっているので、実験途中でもプリントをスラスラ先に進めているのに対して、まず「比」という言葉がわからない生徒は何をしているかわからない状況になるといった具合に、習熟度の差がとても大きかった。

例えば、銅と酸素や、マグネシウムと酸素の化合の質量比率ではグラフを描いて、実際に何対何になっているか出すという作業を行った。

そこで実験終了後にグラフを描くところで、できた人は手を挙げさせて教員が丸付けをし、正解者が班に一人出た後は、その正解者が班員に教える、できた人に丸付けをする、という方法をとった。これ

は担当の先生がしていたやり方で、班の中の誰かが仮の先生となり、８班すべてに１人または２人の先生が存在するという授業スタイルである。先生からこうしなさいと言われるより、生徒同士で教えあう方が記憶に残りやすいことと、教えることで生徒も自信をつけ、次第に何も指示を出さずともほかの生徒に教える主体性が引き出される。最後に、ところどころ説明が足りない部分は補い、まとめとして板書をすることで、多くの生徒がスムーズに「比」を出すことができた。

他教科で学習した知識を用いる際も、教師による最初の説明の段階で理解することができれば、そのあとは生徒の８割以上が自身の力で進めることができた。「解ける」ということが生徒の自信につながり、主体性を引き出すことができ、内容理解や、効率的な時間の使い方などにつながること、このことが授業実践をしていくなかでの最大の学びであったと思う。

終わりに

授業をするうえでは、理科であれば実験を通して、目で見た反応と科学的概念の関係をどれだけ理解できるかが重要であり、そのために実験の際の注意や実験後のまとめ方の説明を、生徒が理解しやすいものにする必要がある。同時に、実際の生徒の学力や説明の内容のレベルなどを考えることが大事になる。理解が早く済むと時間効率なども上がるため、生徒と先生両者にとって、非常に良い授業を行うことができる。

模擬授業などのときに実際の生徒だったらどうなるか、もう少し簡単に説明したほうがいいのか、たくさんの策を自分の中で試行錯誤しながら指導案を作り上げ、模擬授業に励み、来年の教育実習に向けて練習を重ねていってほしい。

先生方から学んだこと

飯干　裕子
（国際言語・文化学科４年）

はじめに

私は地元の中学校で３週間の実習を行った。私の実習先の中学校はひと学年ひとクラスのみの小規模校であった。私の育った町はお店が少ないことや、交通などで不便を感じることもあるが、自然の豊かな街である。教育実習では英語と道徳と学活の授業をした。実習中に先生方からいただいた言葉を通して学んだことを報告する。先生方から学んだことを「授業を通して」と「生徒指導を通して」の２つに分けて紹介したいと思う。

授業を通して

①生徒にとって授業は命

教育実習は実習を行う前から多くの準備が必要である。私は教育実習で授業をすることがとても不安であった。今年の５月頃、実習校に行く際に、授業に関する思いを校長先生から伝えられた。「ここは周りに塾などの環境が整っていないので、生徒にとって授業は命。生徒にとってその単元の時間は一度限りなので、授業に責任をもって挑んでほしい」と言われた。

実際に授業を行ってみると、中学生の定着度に合わせて授業をすることはとても難しく感じた。教員から「文法の説明に時間を割くより、実践的で正しい知識を身に付けることを重視した授業をするように」と指導を受けた。また、「生徒には答えを導く時点で正しい答えを出させて、発表させるように」と指導を受けた。中学生は「発表した言葉を聞いて覚えるため出来るだけ正しい答えを発言させることで正しい記憶を残しやすくなる」と指導を受けた。実習は先生の技を学べる絶好のチャンスだ。

また、実習先では、英語の授業は基本的に英語の専門の先生が２人とALTの先生が１人の計３名で指導していた。３名の先生で連携を取りながら授業を分担し指導していた。そのため、３名のなかに私が加わり４人で授業をする場合と、私が一人だけで授業を行う場合とがあった。このように、チームで指導することもあるので、学校訪問の際に確認しておくと良いと思う。

②自分流を作るために必要な多くの引き出し

「教育実習では自分の専門だけでなく、空き時間に他教科の授業を見たほうがいい。他教科でも生かせるものがあるので多くのことを吸収する機会になる」と指導を受けた。実際に、他教科の目標の立て方や授業の進め方など参考になった。専門だけでなく、学活や道徳の授業にも生かせると思う。また、先生ごとに授業の雰囲気も、生徒との接し方も違ったので、私自身に合う指導の仕方を考えるにあたり参考になった。多くの指導法、授業方法を知ったうえで授業をするのと、自分の知っている知識だけで授業をするのでは実践できる授業の幅が違ってくる。実習中は時間を作ってぜひ他教科の観察に行ってほしい。

生徒指導を通して

①生徒は見ている。

担当教諭からは、「教育実習生であるけれど、教育実習で現場に入ると他の先生方と同じ先生の扱いを受けるので、常に生徒が見ているという意識をもって模範となる行動をとること」と指導された。生徒はよく先生のことを見て、発言を聞いていると感じた。だからこそ、教師自身も校則を守ることや挨拶を積極的に行うことが大切だと思う。特に、時間を守ることは強く意識した。

また、教務主任から「先生は生徒に一度なめられてしまうと指導がしづらくなる。だから、先生と生徒としての距離を保つことが大切である」と指導を受けた。また、「特に女性はなめられやすいので短く的確に指導をしてあまり友だちのような距離にならないように」と指導を受けた。

私は生徒を注意することは苦手で、実際に生徒を指導した後「どう感じただろうか。あの時指導したことは正しかったのだろうか」と考えることや、「一度生徒の意見を聞いて指導したほうが良かった」と反省することもあった。ただ、生徒に厳しいことを言った時のことを振り返って言えることは、生徒を想うからこそ出た厳しい言葉だったと思う。優しいだけの愛情でなく、厳しさの中の愛情も与えられる実習生であってほしい。

②これは体罰か？

校長先生から受けた心に残る話がある。最近は体罰がよくテレビでも報道されているが、生徒の命に係わる場面で生徒に手を挙げることは全て暴力か考えてほしい、という話をされた。「生徒が自殺しようとしたときや生徒の不用意な行動が死をもたらそうとした場合に手を挙げる行為は、暴力になるのだろうか」と問いかけながら話された。

生徒を指導する立場である限り、指導する者として正しい選択を行う必要がある。学生のうちから、多くの人や集団と関わり、いろんな考えや価値観に触れることで、判断能力をつけておく必要があるだろう。

おわりに

教育実習を通して多くのことを先生方から教わったと思う。実習中に将来このような教師になりたいと憧れる先生にも出会えた。このような先生方に直接言葉をいただき、成長できる時間はとても貴重だと思う。実習期間中は、先生方から指導していただいている立場であることを忘れず、三週間教えを乞う姿勢を貫き、私たちよりも多くのことを知り、経験を重ねている先生方に直接学べる時間を大切にしてもらいたい。

教員を目指す「覚悟」

並木　章悟
（史学・文化財学科４年）

はじめに

私は５月14日から６月１日までの３週間、母校の高等学校で教育実習を行った。担当科目は日本史で、２年生の日本史選択生に授業を行った。担当ホームルームは３年生のクラスであった。ここでは、私が教育実習中に感じた事、学んだ事、良かった点、反省点などを可能な限り紹介していきたいと思う。

学校現場の「今」

実習初日は、校長、生徒指導主事、教務主任など様々な先生方の講話を聞いた。その中でも特に印象に残っているのは校長の講話である。

内容は「覚悟する」ということであった。校長は正直に今現在の学校現場の問題を語ってくださった。「夜帰宅するのが遅くなることはよくあるし、朝も早い。土日は部活の指導や土曜講座で丸二日休みなんてほとんどない。いじめも発生しているし、モンスターペアレントもいる」といった内容だった。そして、「今の話を聞いて少しでも、嫌だとか、不安だとか思った人は教員には向いていないかもしれません」と続いた。

私は小さい頃から教員を志していたが、正直、心のどこかでうろたえてしまった自分がいた。夢を見るのは簡単だが、現実の問題ともしっかり向き合うことが必要だと反省した。

校長は様々な問題に対して、「嫌だ」とか、「不安だ」と思う事はないらしい。それは教員としての「覚悟」があるからだ。「ただ自分の専門教科が教えたいだけなら塾や予備校の講師になればいい。学校の教員はむしろ授業外で、どれだけ生徒のために尽くせるかが勝負。生徒のために何十年も尽くす覚悟があなたにあるかをこの３週間で確かめてください。」

この校長の講話にとても心打たれた。生半可な覚悟で教員を目指すと言っていてはいけない。改めて気を引き締めて頑張ろうと覚悟して教育実習はスタートした。

「主体的・対話的で深い学び」の追究

近年、小学校を皮切りに中学校、高等学校の学習指導要領が改訂されている。新学習指導要領の一つの大きなテーマが「主体的・対話的で深い学び」である。ただ単に教師が生徒に知識を教えるだけではなく、生徒主体で展開されていく問題解決型学習のことを指す。少し前までは「アクティブ・ラーニング」と呼ばれていたものである。

実習の初めの時期に、私は指導教諭とどのような授業を実践していくかを綿密に話し合った。当然その時に「主体的・対話的で深い学び」が話題に上がり、私自身「主体的・対話的で深い学び」を実践していきたいと考えていた。

私の「主体的・対話的で深い学び」とはグループを作り、グループワークをし、グループごとに考えを発表するというとても漠然としたものであった。実際、大学で模擬授業を何度も実践してきたが、ほとんどがグループワークを実践してきた。このような授業をしたいと指導教諭に告げたところ、それは理想的な授業ではあるが、現実的ではないという指摘を受けた。指導教諭によれば２年間の限られた時間数の中で、何千年もの日本の歴史を生徒に教えていかなければならず、毎回のようにグループワークをしていては２年間で全範囲は終わらず、新学習指導要領の重要キーワードである「確かな学力」を生徒に身につけさせることはできないということであった。

指導教諭から「ただの思い出作りの実習ならグループワークをしたりすれば、それなりにやり過ごすことはできると思うけど、並木先生が本気で教員を目指すなら、もっと現実的な主体的・対話的で深い学びを一緒に研究しませんか」と言葉をかけてい

ただき、私は理想的であったグループワークなどをする授業ではなく、他の方法で「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことにした。

３週間で私がたどり着いた答えは、授業の「導入部分」と「発問」二点に力を入れることである。教職課程の講義で何度も耳にしてきたキーワードである。至ってシンプルなポイントである。

まず、「導入部分」は生徒がこれから１時間の授業に興味を持ってくれるか、言い方を変えれば、授業に対して「主体的」になってくれるかを決める重要な数分間である。ただ単に前回までの復習に導入部分を使うわけではなく、一見授業に関係なさそうだが、実は関係している生徒の身の回りに関わる話をするなど、様々な工夫を凝らして授業を作っていった。

また「発問」は「対話的で深い学び」をするための重要なポイントであると学んだ。教員が良い発問をすれば、生徒は答えを導くために頭を使う。この瞬間こそ脳がアクティブになっている瞬間であり、勉強の楽しさを実感できる瞬間なのである。発問をする時に史料を使えば、生徒と史料が対話をしていることになり、答えを自分の中で考えれば自分との対話にもなる。周りの生徒と答えを確認すれば、他の人間との対話にも繋がる。それを何度も繰り返すことによって自然と「深い学び」へと繋がっていくのだ。

私はとにかく「導入部分」と「発問」にこだわって授業を実践した。研究授業の前の授業ではとても手応えがあったが、研究授業本番ではあまり上手くいかなかった。授業はその時のクラスの雰囲気、時間帯、発問のタイミングなど、状況によって大きく変わることを学んだ。同じ内容でも全く同じ授業をすることは不可能だと学んだ。すぐには上手くいかない所にとてもやりがいを感じた。授業実践には様々な方法がある。私が教育実習で実践したことが正しいとは限らないし、グループワークを全否定しているわけでもない。これからの教員人生でどんな授業が真の「主体的・対話的で深い学び」なのかを追究していきたい。

在学中の諸経験の大切さ

３週間の実習を通して思ったことは、大学生活中に様々な事を経験しておくことの大切さである。まず教員を志す上で、自分の教科の専門性は必要不可欠である。普段の講義はもちろんのこと、私は学生主体の研究室にも所属しており、自主的に学習してきた。このような活動が実ってか、指導教諭から、日本史の専門性については高い評価をいただくことができた。

授業を実践する上で欠かせないのはコミュニケーション能力である。私は、研究室の副室長や、バスケットボール部の主務、スポーツ振興会の事務局長、更には模擬授業の会の代表など在学中に様々な役職を経験してきた。学生主体の勉強会では模擬授業の実践を何度もしてきたし、積極的に大分県内のバスケットボールの大会に審判役員としても参加し、様々な人々と関わってきた。

このような諸経験の甲斐もあってか、授業を実践するときは、さほど緊張することもなく、堂々と取り組むことが出来た。実習に行く前に、様々な人々と関わり、コミュニケーションをとることを勧めたい。

おわりに

私は３週間の教育実習で本当にたくさんのことを学んだ。３週間は充実したもので、教員を目指す「覚悟」ができた。何年かかっても教員採用試験を受け続ける覚悟もできた。

実習に行くと、周りの生徒や先生方からは学生としてではなく、先生として扱われる。免許をとるだけとか、教員になる気はないといった生半可な気持ちで臨んでは、実習校の先生方や生徒に失礼である。教員になろうか迷っている人ほど「覚悟」をもって実習に臨んでもらいたい。

私たち実習生が必死に授業をすれば、生徒は必ず授業中に良い反応をして味方になってくれる。生徒が真剣に授業を聞いてくれている顔を見ればやりがいを感じるはずだ。ぜひ今後の実習であのやりがいを感じてきてほしい。